

「沖縄通信」第133号(2019年5月)

西浜 樽和

fwnh9861@mb.infoweb.ne.jp

朝鮮半島平和と沖縄

「関西・沖縄戦を考える会」は、「大江・岩波沖縄戦裁判支援連絡会」の後身組織として、2012年6月に発足し、当初からぼくは世話人を務めてきました。今回、会の活動を終了することとなり、韓国より徐勝（ソスン。注1）さんをお招きし、「朝鮮半島平和と沖縄」と題したファイナル講演会を3月22日に開きました。この日、ぼくは司会を担当しました。



司会を担当した筆者

(注1) 徐勝（ソスン）：

1945年4月、父・徐承春（ソスンチュン）、母・呉己順（オギスン）の次男として京都で生まれる。1968年3月、東京教育大学を卒業、韓国に留学。一年間の語学研修を終え、1969年4月、ソウル大学校文理科大学大学院（社会学）に入学。ところが1971年4月20日、「北のスパイ」として弟の俊植（ジュンシク）とともに逮捕される。1971年10月、第一審、死刑判決。1972年12月、控訴審判決、無期懲役。1973年3月、上告棄却、無期懲役確定。1988年12月、懲役20年に減刑。獄中19年を経て1990年2月28日に仮釈放という荊の半生を歩む。

以下はそのレポートで、文責はすべて西浜にあります。

■ 沖縄と私

私はこれまで沖縄のことについて多く関わってきました。

私は昨年2018年4月から韓国・全州（チョンジュ）の又石（ウソク）大学に教授として勤務することになり、10月に「東アジア平和研究所」を立ち上げま

した。そして今年プロジェクトを申請し、研究所の体裁を整えるため努力中です。大きなテーマとして計画しているのは、「朝鮮半島平和の時代と東アジアの変貌」です。「東アジア平和研究所」の発足式の時、鳩山由紀夫さんがやっている「東アジア共同体研究所」の「琉球・沖縄センター」の方々に韓国に来ていただき、「辺野古は今」という写真展を開きました。私自身、東アジアの平和を考える上で、沖縄の平和と朝鮮半島の平和を軸に考えてきましたので、毎年のように沖縄を訪れています。今回提出するプロジェクトにも重要なテーマとして沖縄の平和運動、平和主義に関することを入れようと思っています。

今回、私を講演会に招くのに骨を折って下さった服部良一さんとはいろいろと縁があります。1999年11月に沖縄・南城市佐敷で「東アジアの冷戦と国家テロリズム」という国際シンポジウムを開催しました。韓国、台湾、沖縄、日本のみなさんなど500名ほどが集まった大きなシンポジウムでしたが、その時、服部さんが日本事務局長、私が国際コーディネーターを務めたという関係です。

大江健三郎さんとは何回かお会いしたことがありますし、彼の小説も読みました。今回は大江・岩波沖縄戦裁判に関わっているということなので、『沖縄ノート』を読みました。凄かったですネ、苦しかったですネ。内容は「本土」復帰運動に関するさまざまな内在的矛盾、日本人として沖縄の人たちの非現実的かつ理想主義的な希望に応えることが出来ない、沖縄の人たちの思いを現実化する、心理的・現実的な条件を持たないことへの苦しみが出ています。そのところに興味深さを感じました。

■ 植民地とは何か？

2009年に「沖縄の自治・独立を考える会」という人たちが主催する「薩摩の琉球侵略400年を考える」というシンポジウムがありました。私はそこに招かれ、基調報告をさせていただきました。私は薩摩の侵略以来、特に明治の琉球併合以来、沖縄は明らかに日本の植民地だと考えていました。ところが、「沖縄の自治・独立を考える会」の人たち、金城実さんたちをしてもなかなか「独立」ということを言い切れないでいました。用心して「自治」だとか「自立」だという言葉を使っていました。私は、それはおかしいじゃないかと言いました。

植民地とは一体何か？人間個人として、自分自身として自分自身のことを決定出来ない。すなわち「主権」を持たない、言うなれば「奴隷」ということです。集団として自らの運命を自ら決定することが出来ない集団は植民地奴隷であると考えています。朝鮮も日本に植民地化され、自分たちの運命を自分たちで決定することが出来ない状態に置かれていたということです。

薩摩の琉球侵略や明治以降の侵略も朝鮮史とさまざまな関係があります。薩摩の軍勢は豊臣秀吉の命令で朝鮮半島に出兵したものの、陶工などを連れて来

るなどの一定の「成果」はあったとしても、大きな戦いなしに帰って来たのです。それで出兵の勢いをかって琉球に攻め込み、琉球を実質的に植民地支配することになったのです。このような経緯を含めて、明治以降、米軍支配に至る今日までの沖縄の状況は日本による植民地支配だと考えています。

ところが、沖縄の人たちにはこのような考え方に同意しないところがあるのです。1999年に立命館大学で、沖縄大学教授で台湾問題の専門家である『大日本帝国植民地下の琉球沖縄と台湾』を書かれた又吉盛清さんと研究会をしました。そこに京都沖縄県人会の会長も参加していました。私はレジメのタイトルに「日本植民地支配下の沖縄と台湾」と書いていました。そのレジメを見て県人会の会長が立ち上がり私に抗議しました。彼が言うには、沖縄は日本の植民地ではなかったと言うのです。

また、こういうこともありました。尊敬する新崎盛暉先生に沖縄大学にお招きいただいたことがありました。その時、新崎先生に「明治以降、沖縄は日本の植民地だったのではありませんか？そのような歴史の資料があれば教えてください」と言ったら、「沖縄は日本の一地方であって植民地ではない」ときっぱりと言われました。この先生にしてそうなのか、と思いました。



講演する徐 勝さん(その1)

朝鮮半島でも類似した話があります。「過剰同調」と言いますが、相手はそうは思っていないのに、相手とアイデンティティを一致させたいという同調意識があるのです。日本の植民地下の朝鮮において、いわゆる「親日派」と言われた人たちは、日本人よりもっと日本人らしくなりたいという意識を持っていました。そのために過剰な行動に出ることがあります。例えば、朝鮮人が多く住んでいた「満州」の間島（カントウ）

で独立武装闘争（注2）が起きて、それを鎮圧するために日本軍の討伐部隊が編成されました。あくどいことには、その部隊のほとんどは朝鮮人で編成されたのです。「豆を煮るに豆殻をもって炊く」（注3）というやり方です。編成された朝鮮人は日本人以上に日本人に忠誠を尽くそうとしました。のちに韓国軍の将校になっていく人間たちです。

（注2）間島で独立武装闘争：

日本の侵略主義と中国官憲の板挟みにあった間島在住の朝鮮人共産主義者が1930年5月30日を期して組織した抗日蜂起。竜井、頭道溝など

天図線（天津－図們）沿線を中心に領事館、日本の官公庁、電灯会社、駅、線路、橋梁等を放火・破壊し、以後1年余にわたって農村部での大衆的蜂起を現出させた闘争。

（注3）豆を煮るに豆殻をもって炊く：

豆を煮るのに、同じ豆殻を燃料に使うということで、兄弟や仲間どうしが、お互いに傷つけ合うことをいう。

1945年8月15日、日本が敗戦し、よく聞き取れない玉音放送を聴いていた時のことです。日本軍朝鮮人の大隊長（少佐）が「武運拙く、日本は敗戦した。諸君はこれによって家に帰れ」と訓示しました。すると、朝鮮人隊員が大隊長に対して「売国奴！神国日本が負けるはずがない、卑怯者！」と言って、刀を抜いて斬りかかったという事実があります。この者ものちに韓国軍の将校になっていったということです。

分断された韓国において、共産主義者“アカ”を退治するのに最前線で誰よりも激烈に残忍に「アカ狩り」をやったのは、ほとんど北朝鮮出身者だったということもあります。

このように、被害者が常に一方的に被害者なのかというと、必ずしもそうではない複雑な問題があるということです。特に抑圧されている人たちは抑圧されている状態から抜け出したい気持ちから、抑圧する人間の側に自分を同一化させたいという願望を持っています。

■ 10年前に比べて、沖縄は変わってきた

沖縄県知事選で辺野古新基地建設に反対する玉城デニーさんが当選したということはすごい出来事です。しかし、それ以上に彼の出自について私は考えさせられました。米海兵隊員だった彼の父親は、妻も子どもも置き去りにしてアメリカに帰っています。デニーさんは父の名前も知らないということです。

私は今年1月、伊江島に行つて来ました。デニーさんは選挙戦の第一声を母親の出身地である伊江島の城山（ぐすくやま）から始めたのです。自分自身の出自を明瞭に認識しながら、自分のアイデンティティを作り、自分の政治的な立場を打ち立てようとしているデニーさんの強い意思を私は感じました。デニーさんは“合いの子”、“混血”と言われたこともあり、母親は米兵相手の職業をしていたと推察されることを堂々と明白にしながら知事選に出馬し、そして沖縄県民がその彼を支持したのです。ここがすごいと思うのです。「独立」も「自治」も言えなかった10年前に比べて、現在の沖縄は大きく変わってきたと強く思います。

■ サンフランシスコ講和条約、日米安保条約、日華条約の3点セット

「平和」という言葉は非常に多義的で、気安く「平和」を言う人間をあまり信じてはなりません。安倍首相は「平和」の前に「積極的」という言葉を付け、「積極的平和主義」と言っていますが、これはパワー・ポリティックスの国際政治学的手法で、暴力、力による平和の破壊ということなのです。

平和憲法について、多くの純粋・素朴な人たちは武装しない、戦争を放棄する、これは素晴らしい、世界最高の理想的な憲法だとおっしゃる。私はそうした言説にすっきりとは納得出来ない部分があります。

通説に近い話しになっていますが、日本を占領した米軍は、天皇制を維持しながら自分たちの占領統治を全うするために天皇を処罰せず生かしておくことを考えました。国連憲章の規定からしても戦犯国の最高責任者である天皇をなぜ処罰しないのか、という対日理事会（注4）を構成する他の国々の素朴な疑問に対して、アメリカは“日本を再び戦争出来ない国、軍備を持たない国にすることで容認してくれ”と説得して、アメリカの意思を貫徹しました。

（注4）対日理事会：

正式名称は連合国対日理事会。日本を連合国が占領するに当たり、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の諮問機関として設置。アメリカ、イギリス、ソ連、中華民国の4カ国代表で構成。

アメリカのこうした占領計画は、日本が戦争に負けてから突然思いついたのではなく、1942年一戦争が始まった翌年のこと一に「対日占領政策委員会」が設置され、そこで天皇制研究チームを作り、研究を進めていました。のちに駐日大使となるライシャワーを責任者とする研究チームは、天皇を生かしてアメリカの協力者にすることが賢明な占領政策であると建言しました。その意図した通り、戦後、天皇を処罰しないで徹底的にアメリカが使えるようにしたのです。天皇がマッカーサーと一緒に写った写真は、天皇はマッカーサーの脇の下まで



マッカーサー・天皇会談

の背丈で、矮小でアメリカの脇の下にいるのだという印象を日本の中に植え付けていきました。

平和憲法というのは、天皇制を残存させるための相殺装置として作られたということです。憲法制定過程に関して、古関さんなど専門家たち（注5）はそのようなことを書いています。

（注5）古関さんなど専門家たち：

ここでは、古関彰一著『日本国憲法の誕生』（岩波現代文庫）などの研究成果を指している。



卵の黄身と白身

憲法の平和主義に関するもう一つの問題は、「非武装・平和主義は空論だ」、「実現性のない空想論だ」と攻撃する面と、他方「中立・非武装主義は素晴らしいものだ」という二つの論があります。ここには“空想論”を論じる人間も“理想論”を論じる人間もともに、憲法9条の<中側>だけをもって論じているという問題があるのです。戦後日本の平和主義というのは、「平和」という“卵の黄身”に当たる部分＝<内側>

が、<外側>＝“卵の白身”に当たる部分の「米軍の武力と核の傘」にすっぽりと包まれていて、安楽に安眠できるという構造になっています。

日本は戦後7年間のアメリカの軍事統治を経て、1952年のサンフランシスコ講和条約で主権を回復したといわれています。本当に主権を回復したのでしょうか？国家主権というものは、外交主権と軍事主権で構成されています（プラス外国からの承認というのもありますが）。日本はサンフランシスコ講和条約の締結と同時に日米安保条約を結ばされました。そして台湾との日華条約も締結し、この3点セットが1952年4月28日に発効します。日米安保条約は米軍の駐留が終わっても継続してアメリカが日本に駐留することを取り決めたものです。日本は9条によって合法的な軍事力を許可されないことになっているから、軍事力を保持したとしても行使することは出来ない。日本の軍事力はアメリカが掣肘することによって、日本全体をアメリカがコントロールすることになっています。ですから、ガヴァン・マコーマックなどは「日本はアメリカの属国である」と言っています。

21世紀の現時点で、まだ日本は十全なかたちでの主権国家ではない、と言うと、抵抗感を感じられるかと思いますが、これは相当に本質的な問題だと考え

ています。

■ 「平和憲法のもとに帰る」、「本土」復帰論の過ち

沖縄では1960年代に「本土」復帰運動が盛り上がりました。その時の主張に「平和憲法のもとに帰るんだ」という言い方がありました。その平和憲法というのは先ほどの、〈外側〉が毒まんじゅうのように恐ろしい核兵器に取り囲まれた〈内側〉の平和でした。当時、米軍による占領状態をそのまま継続するのかという議論がありましたが、「本土」復帰すれば解決するという言説には問題があったのではないかと考えます。平和主義、平和憲法というものが、すっぱり毒まんじゅうという〈外側〉に包まれているということ認識すべきだった。もちろん復帰運動をめぐってはそれだけだったということではありません。国際的な平和運動、東西両陣営からのさまざまな影響を受けたということもあります。私も高校生の頃「沖縄を返せ」というデモに参加したことがあります。

その当時の進歩的な人たちの認識の中に、無条件にアメリカの支配から脱出したいという強い気持ちがあって、「復帰」すべきだということになったのだと思います。今だから言えるのですが、結果は「復帰」してみたら同じ仏さまの掌の上だったということです。

■ イデオロギーよりアイデンティティ

ようやく最近になって、沖縄が自らの運命は自らが決めるんだという方向に転回してきたと思います。『世界』3月号に、新城郁夫さんが「自律する沖縄」という論考を發表しています。その中で、やはり「独立」という言葉は使えなくて「自律」という言葉で書いていますが、沖縄自体が「自律的運動体」に変わりつつあると書いている。沖縄はかつてと違って、自らの運命は自らが決定するという方向性を述べています。翁長・前知事の“イデオロギーよりアイデンティティ”という言葉に集約されていることも同じだと思います。

政治的な構図というものが、アイデンティティの問題に移行して来ているのです。これは新しいことではなくて、帝国主義が東アジアに侵入して以来、この地域の人たちは反帝国主義運動・反帝、反日・抗日運動をおこなってきたわけです。その中から毛沢東やベトナムのホー・チ・ミンや朝鮮の金日成などが現れ、共産主義という思想を媒介に独立運動を追求しました。その本質はどこにあるのか？例えば、金日成の本では、共産主義といいながら、実は民族の解放・独立を実現するために共産主義という言葉を選択してきたと書いている。ホー・チ・ミンもそうです。このように“イデオロギーよりアイデンティティ”

の概念は帝国主義侵略があった初めから存在していたということが根本的なことです。さまざまなイデオロギーはその手段であって、時々によって変わっていったということです。抑圧される者が抑圧する者に対する抵抗、反乱として提起されていたものです。

私は光州事件を中心に書いた人権論の本で、「人権の基礎は抵抗権である」と述べています。すなわち社会契約説に現れている近代市民社会の根底にあるものは、自分たちが主権者として社会の主人公になるということ、公権力（国家権力、国家暴力）はどこまでも主権者の統制に従うべきだということです。もしそれを超える時は、その国家暴力に対して抵抗する権利を持っている、すなわち暴力でもってその政権



講演する徐 勝さん(その2)

を倒す権利があるということ、これが抵抗権の概念です。フランス人権宣言やアメリカ独立宣言の基礎にはこの抵抗権が存在しています。

韓国のキャンドル・デモは人権や平和という論議の中で、誰が決定権者なのかということをはっきりと示してきました。数百万のキャンドル・デモにおいて、若者たちが叫んでいたのは、韓国憲法第1条第2項の「大韓民国の主権は国民にある。すべての権力は国民から発する」ということでした。

沖縄の本土「復帰」以降、特に1995年の少女暴行事件以降の流れを見ると、沖縄の人たちが全体として、すなわち共同の運命として、日本から抑圧を受けているという自覚を明確にしてきていると思います。東アジアにおいても、また世界全体においても、自分たちが誰によって抑圧されているのかということをはっきりと示して、自分たちの主権・決定権者としても意見、立場を通して＜主権意識の連帯＞を作り上げていくべきだと思います。

■ 日本の平和主義とは…

支配する国の民衆、植民地支配をする国の国民は、大江健三郎さんのように、内面的な葛藤を経ながらも、大多数の人たちはその国の内に安住するという面があります。日本の平和主義には「平和」を願っているという面もありますが、一歩外に出ると矛盾した側面が現れるということがあります。「内向きの平和主義」と言われたりします。

例えば、日本には地方自治体が1,800ぐらいありますが、「非核平和都市宣言」を打ち出している自治体が8割近くあります。非核平和都市宣言の考え方

には、自分たちは被爆者であり被害者なのだという意識が潜んでいます。“核はない方がいい”と横並び的にやっていますが、その非核平和を宣言している都市の構成員である市民は、さまざまな平和の問題、例えば沖縄の軍事基地の問題などに明瞭な意識を持っているかという点、そうでもないようです。天皇制、自衛隊、靖国神社などの問題についてもそうです。

歴史認識の問題、従軍「慰安婦」の問題、南京虐殺の問題、強制連行の問題などなどについて、全く「平和主義」と適合しない価値観を選択している人たちが多くいるという点に注目すべきです。非武装、不戦、侵略しないと言うのであれば、戦争神社である靖国の問題で明確な態度を取ることが求められるはずですが。天皇と戦争の問題では、昭和天皇に責任があるという言い方が出来るかも知れませんが、日本人たちは、天皇は平和主義者だとして天皇平和主義、天皇民主主義という世論を作ってきました。きちんと議論すべきことだと思います。このように、日本の平和主義というのは、一面においては自らを欺瞞する自己欺瞞装置として機能しているのです。

■ <主権意識の連帯>を

第二次世界大戦が終わって、朝鮮半島は解放されるべき地域だったのですが、米ソ間で分断され、分断国家としての歴史を歩んできました。この分断が朝鮮半島に住んでいる人たちの最大の不幸ですが、このことが東アジアの国際政治の中で悪用され“だし”として使われてきて、今もなお“だし”として使われています。

東アジアの平和を実現するためには朝鮮半島の平和を実現する必要があります。そのイニシアチブが今、朝鮮半島の内部から出て来ています。特に韓国のキャンドル・デモとそれによって生まれた民主政権が取ったイニシアチブがあります。政治的には文在寅大統領の南北和解の動きがあり、北朝鮮の委員長・金正恩の大胆で緻密な提案とが噛み合っ、今日の状況を作り出してきました。それが昨年 2018 年 9 月の南北共同宣言に現れています。

朝鮮半島における和解は、平昌（ピョンチャン）オリンピックと 3 度にわたる南北会談、それ以後の朝米会談に至る一連の過程によって生み出されたものです。今回のハノイでの朝米会談は、アメリカの一方的な要求によって挫折しました。今後は予測しがたいですが、最悪の場合、また昔のような状態に舞い戻るのではという話もあります。今のところ大部分の専門家たちは、そうはならないだろうと言っています。

朝鮮半島では、今の状況はチャンスだという認識で、この機会を機敏に捉えてこれを後戻りさせないよう、くぎ付けしておこうという考えがあります。しかし、そう簡単にはいきません。アメリカの力はまだまだ大きくて、文在寅さ

んが何かしようとすれば、さまざまな形で難癖をつけてくるということがあります。金正恩委員長は今年 2019 年の新年演説で、金剛山（クムガンサン）の観光と開城（ケソン）工業団地を再開したいと言っています。最近韓国では南北関係に関するセミナーや研究会が多く開かれており、国連、アメリカ、韓国による三重の対北朝鮮制裁網の中でもやれることはたくさんあるとの専門家の意見を聞くことができます。特に韓国の独自制裁は、政権の意思によって理論的には解除可能だということです。しかし、それを韓国がやろうとするとトランプがそれは許さないと出てきます。



会場風景

解決は当分難しい状態が続きますが、朝鮮半島の主権は南北の人間が決定するのだという意思を固めて、お互いに意思疎通してアメリカを圧迫していくことだと思います。朝鮮半島が大国アメリカを圧迫すると言うのは大言壮語に聞こえるかも知れませんが、言うなれば「ちっぽけな沖縄」が傲慢な安倍政権の喉に突き刺さった“棘”のように、現政権に対して非常に大きな難関を作り出していて、致命

的な傷を与えつつあることを考えるなら、必ずしもアメリカに対しても不可能なことではないと考えています。

東アジアの人びとは長い間帝国主義の支配を受けて、自分たちが自分たちの運命を決定出来ない状況で暮らしてきました。しかしこの間、自分たちの問題は自分たちが決定していくという意思を明瞭にしています。それを集めて＜主権意識の連帯＞を進めていくべきだと考えています。

沖縄のやり方、すなわち非常な忍耐力を持って非武装、非暴力の抵抗運動としてやっていくということ、これは“弱者の知恵”に基づくやり方です。初めから暴力を使ってやれば負けるのは分かり切ったことです、どつかれても、どつき返さないという、ぐっと我慢する中で、道徳的な優位性を確保していくという戦術は不可避なものだと考えます。

■ 朝鮮半島平和と沖縄

韓国の人には沖縄のことをあまり知りません。それで、私は韓国の人に沖縄のことを知らせていきたいと考え、さまざまな取り組みをしています。この5月末には知花昌一さんを韓国に招いて、「平和主義者の私がなぜ仏教徒になったのか？」という講演をしてもらいます。微々たる試みですが、韓国で沖縄の平

和闘争とは何か？その方法と意志について、韓国の人たちに大いに学んでいただきたいと考えています。

私は、現場でどうしていくのか？を主に考えてきた者ですから、毎年2、3回、平和運動の最先端の現場への旅行なども組織してきました。今、沖縄の運動が韓国と東アジア民衆闘争にとっても核心だと思いますから、韓国の大学を拠点として、得た知見を活かしながら、“朝鮮半島平和と沖縄”の研究と実践を中心に取り組んでいきたいと思っています。

みなさんのこれまでのご苦勞を、私が出来るならば発展させていきたいと思っています。

カムサハムニダ。ありがとうございました。

■（付記）徐 勝さんとぼく

1979年10月26日、朴正熙（パク チョンヒ）韓国大統領暗殺、同年12月、全斗煥（チョン ドファン）による軍事クーデターという朝鮮半島の緊迫した情勢を受けて、1979年秋、大阪で労働団体、民主団体などが集まり「朝鮮の自主的平和統一を支持し、韓国の民主化闘争に連帯する大阪府民共闘会議」（略称：大阪日朝共闘）が結成されました。各地に地域共闘を作ろうとの提起に基づき、当時の大阪市東区と南区をエリアに大阪中央地域日朝共闘を立ち上げて、ぼくは代表委員になりました。

1983年には、関西芸術座の新屋英子（しんや えいこ）さんが演じる一人芝居「身世打鈴」（シンセタリョン—在日オモニの身の上話）を引っさげて、東区、南区の総評系労働組合のある職場で公演しました。郵便局や電電公社や区役所、ろうきんや医療器機会社やNHKなど20ほどの職場を回りました。朝の時もあれば昼休み、夕方など相手の都合に合わせての公演なので時間もまちまちです。新屋さんは全部ボランティアで演じてくださいました。この「身世打鈴」を新屋さんは通算2,000回以上演じられました。

その関西芸術座が呉己順さんを描いた「朝を見ることなく」を公演していて、ぼくはそれを観て、心底感動しました。この劇を何とか大阪日朝共闘で取り組みたいと思い、無理を承知で新屋さんをお願いし、格安で引き受けてもらって1983年秋、青少年会館で実現しました。800名の参加がありました。

1990年2月28日、徐勝さんが仮釈



徐勝さんと筆者

放され、日本に戻って来ました。それから月日もあまり経っていないある日、新屋さんから「徐 勝さんの歓迎祝いを少人数でするから、西浜さんも是非いらっしやい」との電話があり、勇んで出かけました。まさか生きて彼と会えるとは思ってもいなかったからです。彼の姿を見るや否や、ぼくは号泣し、「死ぬまであなたとお会い出来るとは思っていなかった」と、彼に抱きついて（今で言うハグです）涙声で話しました。その時、彼は「ぼくは日本人が嫌いだ」と言ったのです！ぼくは日本人であることの罪、罪責を痛いほど感じ、「ぼくも日本人であることを申し訳なく思う」と応えるのが精一杯でした。韓国朝鮮の人びとにとって、イルボンサラムであるぼくは罪を持つ存在であり、ウチナーンチュにとって、ヤマトンチュであるぼくは罪を持つ存在であることを片時も忘れてはならないのです。その後、新屋英子さんは2016年5月2日に亡くなりました。87歳でした。

こうしてぼくは徐 勝さんと出会い、その後断続的な交流ののち、この日の再会となったのでした。彼がぼくに発した言葉は、今も決して忘れることはありません。